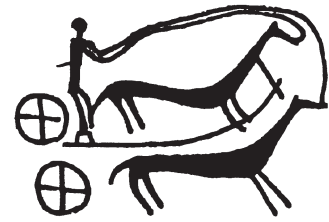


ニューズレター

Hokkaido University
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構
Newsletter No. 89



第3回「シラバスコンクール」推薦科目を公表 (6 ページ)

可能性と多様性を提示するピア・サポート (11 ページ)

第14回ソウル大・北大ジョイントシンポジウム (13 ページ)

北海道地区大学 FD・SD 推進協議会総会開催 (17 ページ)

「国民との科学・技術対話」をサポート (22 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

北図書館の現状と全学教育

附属図書館北図書館長 文学研究科 教授 望月 恒子

2011年4月より北図書館長に就任いたしました。北図書館の現状について、全学教育との関連を中心に紹介します。

活発な利用状況

「北分館」が「北図書館」と名称変更してから2年半たちました。従来から本館と共に北大の附属図書館の役割を積極的に果たしてきた実情に合わせて名称変更に踏み切ったわけですが、新しい名称にふさわしい活発な利用状況がみられます。

近年、北図書館の入館者数が本館をしのぐ状況が続いています。図1のとおり、北図書館の入館者数は平成12年度から大幅に増えはじめ、15年度に

は本館の入館者数を上回りました。北図書館で改修工事が行われた平成17、19年度を除いて、現在までこの状態が続いています。

図書の貸出冊数も、以前は本館が大きく上回っていましたが、平成20年度から北図書館の貸出冊数が急激に増え、21年度以降は両館の貸出冊数はほぼ同数になっています。全国の大学図書館を見渡しても、このような活発な利用状況は希有な現象です。

全学教育と北図書館

北図書館は「1・2年次学生への学習用・教養図書の提供、および自習場所の提供」という独自の役割を担っています。周辺の学部・大学院学生への図書提供も重要な役割ですが、ここでは全学教育履修者への学習支援を中心に紹介します。

北図書館の利用状況は北大における全学教育の位置づけや実施システムと密接に結びついています。

本学では、平成17年度にGPA制度と「秀」評価の導入、18年度に全学教育のカリキュラム改訂と初年次における履修登録単位数の上限設定などのシステム変更が行われました。上限設定は、学生の主体的な学習を促し、十分な学習時間を確保することによって単位の実質化を目指したもので、その結果、自習時間の増加やGPAの向上など着実に成果が上がっていると聞きます(本誌87号3～4ページ, 88号8ページ)。増え続ける北図書館の利用者数もこれらの変革と関連づけることができるでしょう。

北図書館(開架閲覧室)の入館者は学部学生、特に初年次生が多いのが特徴です。昨年度は本館の入

館者のうち学部学生は37.85%だったのに対して、北図書館では、入館者の83.99%が学部学生、初年次生は38.96%(学部学生の46.4%)でした。

図書館職員によれば、以前は主に試験期間中の利用者増が顕著でしたが、近年は試験期間に限らず、授業期間中の平日はずっと混んでいる状況です。授業の合間に利用する学生が増えているようです。

総合入試導入を受けて

今年度から総合入試が実施されたのを受けて、北図書館の利用はますます活発になっています。

4月11日(月)～28日(木)の平日に昼夜2回実施した図書館利用ガイダンスの参加者は合計415名に上りました。平成22年度は129名、21年度は155名でしたから、新入生の図書館への関心が飛躍的に高まっていることがうかがえます。

今年度上半期の北図書館入館者数は、全体で前年度比2.4%増、初年次生は10.1%増、図書貸出冊数は全体で8.8%増、初年次生は19.6%増でした(図2)。また、北図書館の年間貸出冊数の上位を占めるのは、同一の本を5冊以上揃えた生物学・数

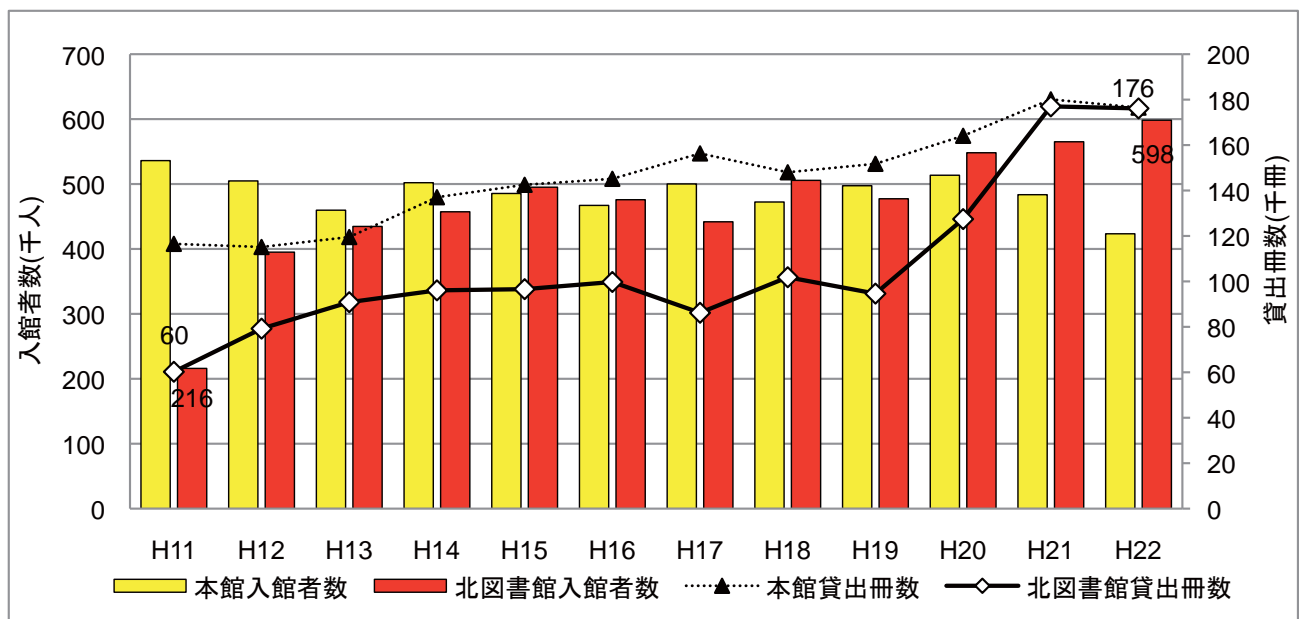


図1 附属図書館(本館・北図書館)入館者数・図書貸出冊数(平成11～22年度)
(図書館概要2011年度10ページより)

学・化学等の参考書がほとんどであり、その他に TOEIC 問題集が含まれます(附属図書館報「榆蔭」138号25ページ)。これも全学教育と直接的に結びついた傾向であり、北図書館における初年次学生への学習支援の役割の大きいことがわかります。

図書館の努力と教員の協力

北図書館の活発な利用は、大学および図書館の努力と教員の協力で支えられています。

改修工事や空調機器の更新により図書館の学習環境は著しく向上しました。コンピュータに関しては、北図書館のELMS端末の利用度は全学でもっとも高く、その実績をもとに今年度は端末が一気に42台も増設され、昨年度までの36台から倍以上になり、ますますよく利用されています。

学生用図書や視聴覚資料の一層の充実と、それらを利用しやすいシステム作りへの努力もたゆまず行っています。平成20年には北図書館の開架図書の貸出冊数の上限を5冊から8冊に増やしました。この年からの貸出冊数の急増はこの変更と結びつい

ていると思われます。

数だけではなく、学生の役に立つ本、学生が喜んで利用する本を揃えるために、学生の図書リクエスト制度の改革(平成19年度)、教員選定図書の選定方法の見直し(20年度)も行いました。

教員選定図書、シラバス講義指定図書、教員推薦図書は、教員一人ひとりが直接、図書館蔵書の選定に関わることができる制度です。これらには予算も相当額、配分されており、学習用図書の充実に大きな効果を上げています。予算配分をさらに適切にするなどの努力は惜しみませんので、先生方も毎年の推薦はたいへんとは存じますが、どうぞご協力をお願いいたします。

北図書館利用に関する統計数値をたくさん挙げましたが、これらの数値から読みとれる積極的な傾向が真に学生の知的関心の向上につながるように、また図書館が学生・教員のさまざまな要求に応えられるように、少しでもお役に立ちたいと思っております。どうぞよろしくをお願いいたします。

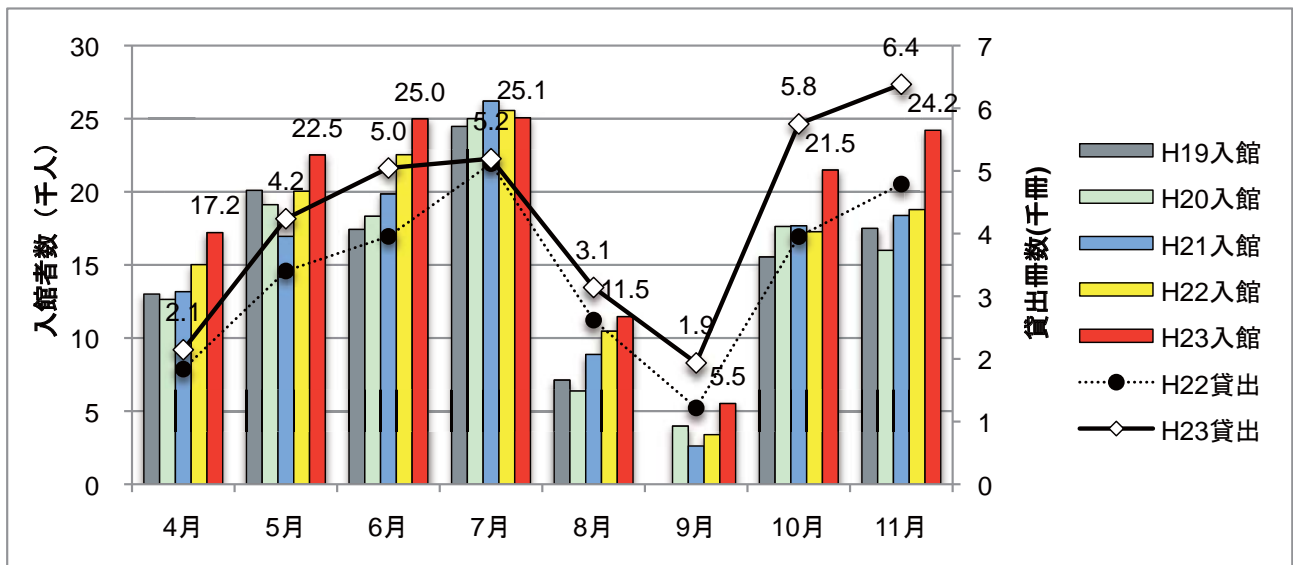


図2 北図書館入館者数・図書貸出冊数(新入生)月別・年度別比較(平成19~23年度)
 * H23年7月の入館者・貸出冊数が前年度と同程度にとどまったのは、本館新棟オープンの影響と思われる。
 (北図書館提供資料より)

成功するキャリア教育をめざして

～ 2011 年度 IDE 大学セミナー～

IDE 北海道セミナーが「成功するキャリア教育をめざして」をテーマに 8 月 18 日、19 日にホテル札幌ガーデンパレスで開催されました(表 1)。

世界は第 3 次産業中心に移行する産業構造の転換期に突入し、キャリア教育は単なる科目としてではなく、高等教育改革の流れのなかでカリキュラム改編をも視野に入れて考える段階になっています。

今回は、積極的にキャリア教育を展開している国内の事例を学ぶとともに、道内の動向も紹介し、今後の各大学の活動の参考となるよう企画しました。

特別講演

最初は、聖泉大学の有山先生の講演でした。聖泉大学は地方(滋賀県彦根市)の小大学(1 学年約 100 名)ながら、日本の私立大学のなかでもっとも手厚いキャリア教育を行っている大学の一つです。

聖泉大学の人材育成プログラムは、平成 21 年度文部科学省学生支援推進事業「地域力循環型キャリア教育プログラム(CLCP)」によって内容が一新され、自分の夢の実現のみが目標ではなく、「自分は地域社会や企業にどのような夢を与えられるか」をテーマに地域連携の双方向型・協働型・リアリティ体感型の学習を展開しています。価値を消費する人から、価値を生産できる人への目標転換です。

1 年生で「市民のロールモデルに接し、社会活動を知る：市民活動体験」、2 年生で「よき市民となり社会活動を創り出す：バーチャルカンパニーによる地域イベント開催」、3 年生で「社会の一員として企業の営利活動に挑戦する：企業チャレンジ

プログラム及び社長との合同研修」を行うという内容で、系統性をもって組み立てられています。

この成果は着実に定着し地域の期待や学生の成長を教職員が実感し共有できるようになりました。キャリア教育は就職という枠に留まらず、現代社会が求める教養教育として再編されるべきで、ジョブポリシーの策定と連動したカリキュラム改編が大学教育改革の大きなうねりとなりつつあります。

次は、国立大学のなかでは組織的キャリア教育に取り組んでいる新潟大学の西條先生の講演でした。

新潟大学では、平成 23 年 4 月施行の就業力の育成に関する大学設置基準改正に先駆けて、その理念である「自律と創生」に向け、22 年 4 月に教育・学生支援機構の中に入学センター、教育支援センター、学生支援センターとならんでキャリアセンターを設け、15 名のスタッフで入学から卒業まで一貫した組織的・体系的な支援体制を強化しました。人材育成やキャリア開発の観点から、正課・正課外にかかわらず、学生自身が主体的にキャリア形成に取り組めるよう、各部局と教育・学生支援機構内の各センター等が協働する支援体制を整備したのです。

正課の講義には、キャリアセンターが開講する「キャリア意識形成科目」などがあります。

また、平成 20 年度から運用を開始した「CAN (Career Action Note) ガイド」をはじめ、現在 5 種のキャリア意識形成支援ツールを展開しています。CAN ガイドは「計画を立て行動に移すこと」(Career Action)の大切さと「やればできる」(You

表 1 2011 年度 IDE 大学セミナープログラム

8 月 18 日 (木) 特別講演	
「地域力循環型キャリア教育プログラム」	聖泉大学 教授 有山 篤利
「新潟大学におけるキャリア教育の展開」	新潟大学教育・学生支援機構キャリアセンター 准教授 西條 秀俊
8 月 19 日 (金) シンポジウム「北海道におけるキャリア教育の進展」司会：北海道大学教授 細川 敏幸	
「専門学校におけるキャリア教育の取り組み」	北海道ハイテクノロジー専門学校 教務部長 蔵崎 美佳
「社会人の学び直し教育と学生の就業力育成事業の取り組み」	北翔大学生涯学習システム学部 教授 小室 晴陽
「キャリアデザイン 10 年支援プログラムの構成と教育効果」	小樽商科大学教育開発センター 専任教員 辻 義人
「北海道大学におけるキャリア教育の取組みと今後の方向性」	北海道大学高等教育推進機構 准教授 亀野 淳

can do it!) というメッセージを込めて命名され、学生が卒業後の将来を見据えて、いま何をすればいいか自ら考えて主体的に行動し大学生活を充実させるために、目標設定や行動計画を支援するツールとして新入生全員に配布しています。

さらに、キャリアセンターのスタッフのうち8名はキャリアコンサルタント等の資格を有し、就職活動の支援だけでなく、低学年からのキャリア教育やキャリアカウンセリングにも力を入れています。

シンポジウム

2日目のシンポジウムでは、道内の3大学、1専門学校が取組が報告されました。

蔵崎先生は、北海道ハイテクノロジー専門学校のキャリア教育について次のように説明しました。本校のミッションは職業人教育を通じた社会貢献にあり、その職業人教育はキャリア教育と専門的な知識・技術を身につける専門職業教育を2本の柱としています。

まず、入学前に職業の擬似体験を行い、今の進路選択が今後の可能性につながることを各学生に示し、入学直後には目指す職業に必要な能力等を納得して個々の目標を設定してもらいます。

さらに、ポートフォリオを導入して学生の自己肯定感を醸成し、各学生は自信を深めて次の課題に向かいます。挨拶などマナー指導のみではなく、このキャリア教育の実践により、誰もやめない学校、就職率100%は当然として、卒業後1年以内の離職率ゼロの学校を目指しています。

北翔大学の小室先生は、私立大学におけるキャリア教育の取組を紹介しました。北翔大学では平成19～21年度に「社会人の学び直しニーズ対応

教育推進事業」、22年度から「大学生のための就業力育成支援事業」を実施しています。前者は建築分野におけるデザインプレゼンテーション能力と説明表現技術の向上を目指す産学協働の教育プログラムで、北海道建築士会のCPD制度の単位認定を受けた講座や体験セミナー、講演等を開催しました。後者は本学学生向けの就業力トレーニングプログラムで、資格対策講座、職業人講演会、仕事の現場見学会等の実施、社会人基礎力科目の追加など多面的に展開しています。

小樽商科大学の辻先生は、文系国立大学におけるキャリア教育の展開を紹介しました。小樽商科大学ではキャリア教育の体系化を目指し、平成18年度より「キャリアデザイン10年支援プログラム」を実践してきました。これは、大学生活4年間を中心に、その前後3年間を視野に捉えた長期的なキャリア形成支援で、22年度には文部科学省大学生の就業力育成支援事業に採択され、さらに深く幅広いキャリア教育実践が可能な体制が整備されつつあります。その効果の検証のため、他大学と比較してキャリア教育の効果測定指標を構築する取組も紹介されました。

最後に北海道大学から亀野先生が、初年次におけるキャリア教育として全学教育科目の「大学と社会」「キャリアデザインI・II」や「全学インターンシップ」を紹介し、また学生、卒業生、企業に対するアンケート調査結果等をもとに、それぞれの意識のギャップやキャリア教育の問題点を挙げ、今後の大学教育、キャリア教育、インターンシップ等における大学と企業の連携では、それぞれの組織ではできないことを互いに補い合うべきであると述べました。(細川 敏幸)

第3回「シラバスコンクール」推薦科目を公表

北大では平成12年度から各授業科目のシラバスをホームページに公表するとともに、教育ワークショップなどで授業設計の方法、シラバスの書き方について指導し、内容改善をはかってきました。

平成21年度からは、シラバスの改善に役立てていただくため、高等教育推進機構全学教育部、高等教育研究部等の協力のもと「シラバスコンクール」を始め、今回は平成23年度の全学教育科目、学部専門科目、大学院科目のシラバスの中から参考となる25科目を選んで公表しました。

<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/syllabus/syllabus2011/top.html>

シラバスは、部局、課程、授業科目の性質により、きわめて多様で、一律に「模範例」を挙げることは困難ですが、各科目・各学部・各大学院から複数推薦された中から選びました。なお、一昨年度ならびに昨年度に選ばれた方は除外しました。

良いシラバスとはどのようなものか、今後も部局、課程、授業科目等ごとに、FDや関係教員グループの討論で議論を深め、学生の役に立つシラバスを作ることが求められています。

北大のシラバスについては、外部評価や今回のシラバスの点検・選択の過程で、いくつかの改善点が指摘されました。たとえば「出席点(○点加点)」「15回目の授業：最終試験」などの記述は不相当とされます。授業に出席するだけで合格となるのは不相当で、最終試験は16回目に行うべきものです。

シラバスの作成にあたっては、以下の点にもご留意ください。

シラバス作成の留意事項

1) 必須項目(授業の目標、到達目標、授業計画、準備学習(予習・復習)等の内容と分量、成績評価

の基準と方法)はもれなく、できるだけ具体的に記述してください。

2) 「授業の目標」(一般目標)と「到達目標」(行動目標)を明確に区別し、それぞれ(教員ではなく)学生の視点から記述してください。

「授業の目標」(一般目標)では、授業で扱う内容の概略を、たとえば「○○について理解する」などの形式で、できるだけ具体的に記述します。

「到達目標」(行動目標)では、この授業で学生がどのような能力を身につけることが期待されているかを、たとえば「○○について説明することができる」などの形式で、具体的に記述します。

3) 「到達目標」(行動目標)と「成績評価の基準と方法」は密接に関連づける必要があります。到達目標は必ず成績評価の対象としなければなりません。

4) 「授業計画」と「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」については、2単位の授業科目では、定期試験の期間を除いて、最低でも30時間(15回)の授業時間の確保が必要とされ、また、教室内外の学習を合わせて、標準的に90時間の学習が必要とされていることを念頭において、両項目を密接に関連づけ、できるだけ具体的に記述してください。

5) 「成績評価の基準」においては、単純に出席を点数化して加算することは厳格な成績評価を実現するうえで問題があるとされています。学生が能動的に参加する授業計画を立て、授業への積極的な参加を評価するといった授業設計が必要です。

6) 部局独自の様式のシラバスでも、「授業の目標」(一般目標)と「到達目標」(行動目標)の区別をし、「授業計画」と「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」を関連づけて記述してください。(細川 敏幸)

全学教育 GENERAL EDUCATION & 総合教育 FIRST YEAR EDUCATION

科目責任者・クラス担任からひとこと

英語Ⅱ 授業報告からみる総合入試 1 年目の学生像

「英語」企画責任者 メディア・コミュニケーション研究院 教授 河合 靖

北大英語カリキュラムでは、標準的な外部指標をより所に学生が各自の熟達度を把握し、その後の目標設定ができるよう、1 年次 1 学期必修の英語Ⅱ（オンライン授業）の評価の一部に TOEFL-ITP を組み入れています。英語 CALL 実施委員会のまとめた授業報告から今年度の学生像を見てみたいと思います。

けではないので、総合入試制度による学生の取り組み意識の向上および授業担当者の継続的な教材内容・授業運営方法の改善の影響かと推測しています。

TOEFL-ITP 試験の結果

2005 年の TOEFL-ITP 受験者平均点は 460.8 点でしたが、2006 年の英語Ⅱ 開始以来少しずつ上昇し、2009 年には 470.1 点でした。昨 2010 年は試験当日の冷房装置の故障の影響と思われる落ち込みで 465.2 点に後退しましたが、今年度は 477.4 点と再び上昇基調を回復しました（図 1）。

例年学期はじめに行っている小規模の TOEFL 模擬試験の結果は、今年度のスコアが特に高かったわ

英語Ⅱ の総合評価

英語Ⅱ では、総合的な英語基礎力向上を目指して、4 技能を含む課題が出され、今年度から課題の理解を測るための期末試験も評価に加えました。英語Ⅱ の総合評価も全体的に上方にシフトしています。

反面、英語Ⅱ の不可は昨年度の 68 名から今年度 136 名と倍増しました。学習意欲や態度に問題を抱えた学生も増えているといえるかもしれません。

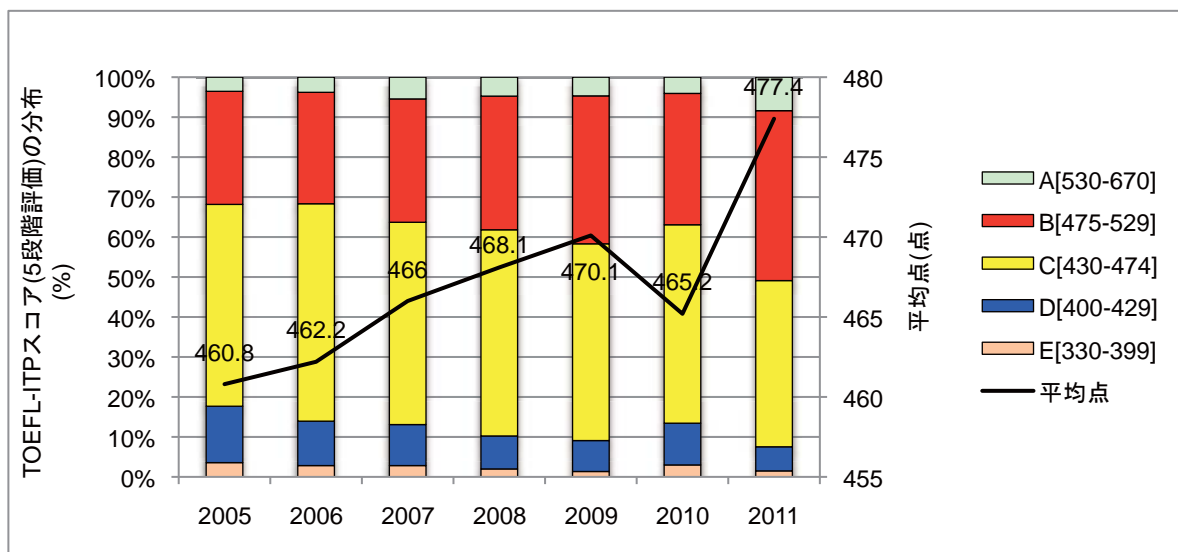


図 1 英語Ⅱ 受講者の TOEFL-ITP スコア分布と平均点の推移 (2005 ~ 2011)
 棒グラフ：A (秀相当), B (優相当), C (良相当), D (可相当), E (不可相当) の % ; 折れ線グラフ：平均点
 2011 年度英語Ⅱ (オンライン授業) の報告 (英語 CALL 実施委員会) より

高校物理と大学の物理学

「物理学」企画責任者 理学部 准教授 野崎 龍介

総合入試の導入にともない、全学教育科目を履修する理系全クラス(16～52組)は、学部別入試と総合入試による入学者が混在する編成(総合合同クラス)になりました。各クラスにはさまざまな学生が混在しています。ここで問題になるのは、高校理科の履修状況が異なる学生が混在していることです。

高校物理履修者と未履修者が混在する学生集団に対してどのような授業を行うか議論しました。そもそも物理学は、さまざまな自然現象を数値化し、それらの関係を数学で記述し、なるべく普遍的な法則を見つける学問です。つまり、物理学の学習には数学が使えることが前提となります。ところが高校物理では必要な数学の習得が追いつかず、特別な工夫が必要です。しかし、理系総合合同クラスでは基本的に全学生が初等物理学で必要な数学を身につけ

ていますので、理想的な物理学の講義が展開できます。

今後、授業内容のさらなる検討は必要ですが、高校物理未履修者に対しては分かりやすく、高校物理履修者にとっても既知概念の整理がつく授業が可能になります。私はこれが「高校物理」と「大学の物理学」の違いだと思っています。

私は毎回の授業内容からレポート課題を出し、次回授業開始前にそのレポートを回収していますが、今年度のレポート内容は昨年度に比べて明らかに充実しています。総合入試入学者が学習の雰囲気牽引しているのかもしれませんが。

9月末のクラスアワー、学科紹介オリエンテーションから

平成23年度46組クラス担任 農学部 准教授 橋本 誠

総合入試制度が導入されて最初の新生を迎え、約7ヶ月が過ぎました。4月の授業開始時や、夏休み9月末に行ったクラスアワー、学科紹介オリエンテーションなどを通じて感じたことを述べさせていただきます。

総合入試で入学された学生さんは将来の学部・学科分属を非常に気にかけられるようです。私自身もその昔、本学が理I-III系での入試制度だった頃に学部・学科分属で頭を悩ませた経験があり、この選択は学生さんにとって簡単ではないことは容易に推測されます。

少しでも意識を高くもってもらえればと考え、9月末のクラスアワーでは副担任の久保友彦先生と

一緒に2日間かけて可能な学生さん全員と個人面談をさせていただきました。将来に対する意識を高くもってられる学生さんにはさらなる高みへ、目標を見失いかけている学生さんには漠然とした将来像からそれぞれに適した学部・学科等を複数挙げ、後期の成績の重要性を説くお手伝いを、微力ですがさせていただきます。

個人面談と同時に実施された学科紹介オリエンテーションにも参加させていただき、積極的に研究内容の質問をされる学生さんの姿を見て、学部・学科に対する意識の高さを改めて垣間見た感じがいたします。

自分と違う考え方の人と話す機会はこの後そう多くあるものではなく、研究等の壁にぶつかったとき、いろいろな意見をもらえることが大切になってきますので、クラスでの人間関係を大切に日々過ごしていただきたいと思います。

第2回クラス担任連絡会を開催

9月22日に高等教育推進機構において平成23年度第2回クラス担任等連絡会が開催されました。昨年と同様、2時間程度のプログラムとし、クラス担任・副担任104名のうち44名が参加しました。

当日は担当の山口が出張のため、和田博美全学教育部長に代理として司会をお願いしました。まず和田教授から「学生の学修状況について」学生の自習時間やGPAが着実に伸びていること、近久武美学生相談室長より「学生相談体制について」学生相談体制の整備やカルト対策について、学生対応は学内の相談機関と連携してほしいこと、川端潤アカデミック・サポートセンター長より「アカデミック・サポートセンター(ASC)について」活動は活発に利用されているが引き続きご案内いただきたいことなどが、それぞれ説明されました。

つづいて、武蔵保健センター長の「学生の健康

管理について」と、保健センターの精神科医朝倉聡准教授の「学生のメンタルヘルスについて」の講演がありました。感染症や酒とタバコに関する注意、精神衛生相談の受診者数や自殺者数の変遷等について、特に自殺を防ぐための諸注意、メンタルヘルス・ファースト・エイド(メンタルヘルスの問題を有する人に対して、専門家の支援が提供される前に提供すべき支援)について説明がありました。

次に「クラス担任による事例紹介並びに意見交換」として近久教授の司会で、大沼義彦教育学研究院教授、住吉孝工学研究院教授、大橋和彦獣医学研究科教授からご発表をいただきました。

2時間にわたる連絡会は、活発な質疑もあり有意義な会となりました。クラス担任のみなさまの日頃のご努力、ご協力に感謝申し上げます。

(総合教育部長・理学研究院教授 山口 淳二)

学部・学科等移行ガイダンス

学部・学科等紹介

9月26日と27日に学部・学科等移行ガイダンスおよび学部・学科等紹介が実施されました。

総合入試により入学した初年次学生に関しては、本年度3月に学部・学科等への移行が行われます。すでに4月の入学時にも移行に関するガイダンスを行いました。2学期の開始前にも再度ガイダンス

を行い、あわせて移行先となる各学部・学科等の説明会を開催しました。移行先となる学部・学科等の詳細について、所属教員が丁寧な紹介を行おうと企画したものです。

まず、9月26日午後、文系総合入試学生向けには1クラス、理系総合入試学生は4クラスに分



写真1 学部・学科等移行ガイダンス



写真2 学部・学科等移行ガイドブック

けて1時間30分のガイダンスを行いました。今回は4月に行われた移行に関する説明をさらに詳細に解説し、さらにこのガイダンスの直後に行われる第1回移行志望調査について、また移行についてのシミュレーションを示しながら詳しい説明等も行いました。説明は小内透役員補佐、川端潤アカデミック・サポートセンター長と山口が分担して、スライドを使いながら行いました(写真1)。

このようなガイダンスは2学期終了時の移行の直前にも再度実施します。何度もガイダンスを行い、円滑な移行の実現を目指しています。

また、当日は移行に関する詳細なパンフレット「学部・学科等移行ガイドブック(平成23年度総合入試入学者用)」を配布しました(写真2)。これをよく読み返して、移行の仕組みについて十分に理解してほしいと願っています。

学部・学科等紹介

27日には朝9時から17時15分まで「学部・学科等紹介」が行われました。すべての学部・学科等の移行単位は、それぞれ本機構E棟やS棟の教室を自由にアレンジしたブースで、学生向けにさまざまな趣向をこらした紹介を行いました(写真3)。

今回は初めての試みだったので、30分の紹介時間の後15分の休憩・移動時間を設け、これを10回繰り返しました。学生は最大10のブースをまわることができます。学生には前日の移行ガイダンス時に、各移行単位がブースを設けている教室番号と紹介時間帯が記載されている資料を配布しました。

当日学生はこの資料を片手に自分の興味のある

学部・学科等の展示ブースを次々に訪問していました。「学生は朝早くからはあまり来ないのでは？」と予想していましたが、9時の開始前から本当に多くの学生が廊下で待機し、熱心に多くのブースを訪問していました。訪れる学生の数が多くて廊下まであふれている部屋もあれば、少数の学生とじっくり話しこんでいる部屋もありました。教員だけでなく、大学院生や学部の上級生も案内や説明を行っていました。かなり設営に力を入れたブースもあり、担当された教員のみなさまの熱意がひしひしと伝わってきました(写真4)。

終了後、各学部・学科等にアンケートを実施し、おおよその訪問学生数や今後の改善に向けた自由意見を記入してもらいました。訪問した学生の概数をみれば「人気度」が推測できますが、その数が多ければ成功というわけではないでしょう。要は、今回の学部・学科等紹介で学生の「希望」「思い」をしっかりと受け止め、その期待に答えられたか、学生が疑問を持ち帰ることなくスッキリした気持ちで終わったかなどが本当に重要なことだと思います。

学生へのアンケートも実施しましたが、今回は回収がうまくいきませんでした。とはいえ、今回の学部・学科等紹介で垣間見た学生の熱気は移行制度の将来に大いに希望を抱かせるものでした。

各学部・学科等の紹介と並行して、アカデミック・サポートセンターの相談会も盛況でした。

今後も、改善を加えながら、このような試みを続けていく予定です。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(総合教育部長・理学研究院教授 山口 淳二)



写真3 学部・学科等の紹介



写真4 趣向をこらした展示ブース

人をつなぎ、学生生活の可能性と多様性を提示するピア・サポート活動

ピア・サポーター 国際広報メディア・観光学院博士課程1年 平 侑子

「学生による学生支援」組織としてピア・サポートが発足して、2011年9月で2年たちました。ピア・サポートでは「困っているけれど、どこに相談に行ったらよいかわからない」という学生を最適な学生支援組織に案内するインターカー業務のほか、下記のような学生生活の充実につながるイベントを行っています。昨秋には情報教育館に部屋を移転し、多くの利用者を迎えて活動の幅が広がっています。

人をつなぐ

これまでピア・サポートは「人をつなぐ」をキーワードに活動してきました。たとえば、本活とピア・カフェという2つのイベントがあります。

本活とは、学生から下線やコメント付きで本を譲り受け、後輩が自由に閲覧できるようにする活動です。本を介して先輩と後輩をつなぎ、後輩は先輩がどのように本を利用していたのかわかります。

ピア・カフェ（写真1）では、期間限定でコーヒーやお茶を入室者に提供しました。飲み物を介してサポーターのほうから積極的にコミュニケーションをとることにより、ただのスタッフではなく「顔の見える」ピア・サポーターになり、利用者との「つながり」が構築されつつあります。

学生生活の可能性と多様性を提示する

後期からは、学生生活の「可能性と多様性を提示する」ことも活動の一つの柱にしました。

今年度から総合入試制度が始まり多くの総合系の学生が部屋を利用しています。彼らは自分が入りたい学部を目指して努力していますが、当然、全員が希望の学部に入れるわけではありません。

また、学部選択にあたって、どの学部で何の研究ができるのかという情報は入手できますが、たとえばアルバイトと両立できるのか、1週間のうち何がいちばん大変なのか、といった学生生活の「実際のところ」の情報はなかなか入りづらいようです。

そこで私たちは先輩の学生生活のエピソードを集め、いま一直線に学部を目指している1年生に道は一つだけではないことを伝え、さまざまな大学生活の可能性を探ってもらう活動を目指しています。

来年度も「人をつなぎ」学生生活の「可能性と多様性を提示する」活動に力を入れ、北大生がより充実した大学生活を送れるようサポートします。

詳しくは、北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成22年度版）もご参照ください。

<http://gakuseishien.academic.hokudai.ac.jp/support/peer-support#item4>



写真1 ピア・カフェ

学士課程教育における教養教育の意義を問う

～第 61 回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会～

9月1日～2日に秋田大学で第61回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会（旧東北・北海道地区大学一般教育研究会）が開催され、「学士課程教育における教養教育の意義を問う」をテーマに基調講演、分科会および事例報告が行われました。

2008年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」を受けて、本研究会でも過去3回、学士課程教育をテーマに取り上げ、今回もその継続です。

基調講演

第1日は立教学院本部監査役の寺崎昌男先生の「学士課程教育における教養教育の位置と意義：再考－「政策」「カリキュラム」「学生の能力」の視点から－」と題した基調講演から始まりました。

副題に掲げた3つの視点から教養教育を問い直し、教養教育はどうあるべきか、カリキュラムとしてもつべき要件を把握しているか、学生の能力をどう育てるか、さらに教養教育の運営と組織の重要性、教職員の能力開発の必要性が指摘されました。これらを通してその大学独自の教養教育を構築していくことが建学の理念の表明になるというお話でした。

分科会（写真1）

つづいて3つの分科会で話題が提供されました。

第1分科会「高校と大学の接続性に着目した取組」では、高校を卒業したばかりの学生をスムーズに大学の学習に移行させる取組が報告されました。

第2分科会「学修や教育課程の充実に着目した取組」では、授業評価による教育の改善・充実、ポートフォリオを活用した学生の学習成果の把握などの取組が紹介されました。

第3分科会「大学と社会の接続性に着目した取組」では、社会が学生に何を求めているかを考えたキャリアデザインの育成や、社会との連携による教育活動が紹介されました。

事例報告

第2日には「全学基礎教育課程『武蔵野BASIS』について」と題して武蔵野大学教養教育部の北條英勝先生から事例報告がありました。

武蔵野大学では全学共通基礎課程を「武蔵野大学の学生として身につけておかなければならない必須の力の養成課程」と位置づけ、異なる学部の学生が一つになって学び、自己基礎力を培う教育を実践しています。自己基礎力のなかで重視されているのが、自己を知り、他者を理解し、人生の歩き方を学ぶことです。学科横断的に学生の混成チームを編成し、関心をもったテーマを共同で研究して成果発表を行い、これらの共同作業を通して、他者と信頼関係を築く・協力し合うといった社会人としての基礎力を育むプログラムです。

このような研究会への参加は、私は初めての経験で、教養教育の重要性を認識し実践している先生方のお話を伺えたことは新鮮な驚きでした。大学がおかれている状況や建学理念は異なりますが、北海道大学の教養教育に関わる者の1人として、教養教育の内容について考えさせられた2日間でした。

来年度は北海道地区で、酪農学園大学が当番校となって開催されます。教養教育へのさまざまな取組とその成果の紹介に期待しています。

（全学教育部長・文学研究科教授 和田 博美）

高等教育 HIGHER EDUCATION

第14回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウム

分科会「高等教育におけるティーチング・エクセレンスの方針と戦略—過去、現在、未来」

北海道大学とソウル国立大学校（以下ソウル大学）の合同シンポジウムは14回目を迎えました。

広大なソウル大学キャンパスを会場に、11月17日に全体会が催され、学生による韓国伝統芸能の披露など温かい歓迎を受けました。18日からは16の分科会が行われ、高等教育推進機構はソウル大学 Center for Teaching and Learning (CTL) と共催で標題のテーマの分科会を設けました。CTLとの共催は3年目で、本機構からは6名が参加しました。

ソウル大学 CTL から

まずイ・ジュンシク教授が次世代 e-ラーニングについて報告しました（写真1）。ソウル大学では2006年から独自に開発した e-ラーニングポータルシステムを教員・学生の教育・学習活動に活用していますが、新たにフェイスブックなど世界的に市民にも広まっているさまざまなシステムを教育環境に応用する次世代型システムの検討を始めています。

続いてチェ・ジョンア研究員より CTL における学修相談について報告があり、オンライン相談、個別面談、グループ相談、心理検査など多様な相談体制が紹介されました。相談件数は1年半で約350人、特定の学部の学生の相談が多いなど、学生に対する本サービスの周知には苦慮しているようです。

最後にパク・ウンミ研究員より外国人教員向け

教育支援プログラムに関する報告がありました。教員の国際化を進めるため、年間5回の教育方法に関するワークショップの開催や、エクスカージョンを通じて韓国の文化や言語に関する理解を深める取組が効果を上げていることが紹介されました。

北海道大学高等教育推進機構から

アカデミック・サポートセンター (ASC) の宮本と斉藤が本学における学生の学習意欲向上や課外活動活性化のための取組を報告しました。

まず4大学 IR ネットワーク学生調査から「学生と教職員の関係が希薄」「女子学生の方が大学生活全般において充実感をもっている」という結果を示しましたが、ソウル大学の学生も同様だそうです。

また総合入試の導入と ASC の学習支援活動を紹介し、学習相談に来る学生は比較的 GPA が高いという結果にはソウル大学の参加者も注目しました。

次に山田邦雅特任准教授が、本学における教員の教育活動に対する評価、特に授業評価の高い教員の表彰制度の新設や「大学情報データベース」による教育活動・研究業績等の公表について紹介しました（写真2）。

国や大学の事情は異なっても、高等教育をキーワードに共通項も多く、継続した連携の重要性を感じました。（宮本 淳，斉藤 準）

総合教育の充実を目指して

～第19回 北大教育ワークショップ～

北海道大学教育ワークショップ(全学FD)は平成19年度から年2回開催され、2011年度2回目は11月11日、12日に恒例のないえ温泉「ホテル北の湯」で、表1の内容で行われ、学内の若手教員28名と学外から5名、計33名が参加しました。

初日は情報教育館3階スタジオ型中講義室で午前8時40分から佐伯浩総長が挨拶し(写真1)、すぐにバスで出発しました。バスの中では参加者の自己紹介を行いました。

会場ではまず山岸みどり教授のミニ講義「北大の全学教育と総合入試」で研修が始まりました。この教育ワークショップの中心はシラバスの作成法の学習ですが、毎回そのときにあったテーマで講演等を行います。今回は今年度から始まった総合入試に合わせて「総合教育の充実を目指して」としました。

次のミニ講義は、情報基盤センターの岡部成玄教授に「授業における著作権」について話していただきました(写真2)。

つづいて研修のオリエンテーションのあと、参加者を5グループに分け、魅力ある授業の工夫を盛り込み新しい授業を設計するという課題でグループ作

業を行いました。各グループにはあらかじめ表2の授業タイプが指定されています。

まずKJ法でアイデアを出し、グループ討論は「北大方式」により、討論内容をパソコンに入力し、プロジェクトで2mくらい先のスクリーンに投影し、グループ全員がそれを見ながら討論し(写真3)、全体討論の発表はPower Pointで行います。

授業の設計は3つのセッションに分けられ、(I)科目名と目標、(II)方略(15回分の授業内容)、(III)「評価基準」の順に行われました。各セッションは、(1)30分程度のミニ講義、(2)小グループに分かれて60分の討論、(3)全員が集まって討論の成果の発表会を繰り返す構成です。

夕食後には高等教育推進機構の山田邦雅特任准教授のミニ講義「クリッカー」を行いました。

2日目には、シラバスの最後の項目「評価」を完成させてワークショップを終了し、有意義な会になりました。各グループ作成のシラバスの科目名と目標は表2の通りです。

最後に、研修会修了証の授与式が行われ(写真4)、昼食後、札幌に帰りました。(西森 敏之)

表1 第19回北海道大学教育ワークショップ プログラム

2011年11月11日(金)		
8:25 受付 北海道大学情報教育館3階 スタジオ型多目的中講義室	16:40 グループ作業 IIの課題の説明・グループ学習室への移動(10分)	
8:40 挨拶 総長(15分)	16:50 グループ作業 II「授業の設計2:(目標の手直しと)方略」(60分)	
8:55 バス出発 研修開始:オリエンテーション (挨拶,自己紹介,プレ・アンケートの記入)	17:50 発表・全体討論(40分)	
10:10 ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着,玄関前で記念写真	18:30 夕食(50分)	
10:20 ミニレクチャー「北大の全学教育と総合入試」 (25分+質問5分)	19:20 ミニレクチャー「クリッカー」(25分+質問5分)	
10:50 休憩(15分)	20:00 懇親会	
11:05 ミニレクチャー「授業における著作権」(25分+質問5分)	2011年11月12日(土)	
11:35 ミニレクチャー「FDの目的と教育倫理」(25分+質問5分)	7:30 朝食	
12:10 昼食50分	8:30 ミニレクチャー「教育評価」(30分)	
13:00 研修のオリエンテーション「ワークショップとは」 ・アイスブレーキング(30分)	9:00 グループ作業 IIIの課題の説明・グループ学習室への移動(10分)	
13:30 ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」 「学習目標」(30分)	9:10 グループ作業 III「授業の設計3:(方略の手直しと)評価」(60分)	
14:00 グループ作業 Iの課題の説明・グループ学習室への移動(10分)	10:10 発表・全体討論(50分)	
14:10 グループ作業 I「授業の設計1:科目名・目標の設定」(60分)	11:00 休憩(15分)	
15:10 発表・全体討論(40分)	11:15 修了証授与式(10分)	
15:50 休憩(20分)	11:25 参加者の個人的感想や意見(35分) (ポスト・アンケートと総合評価アンケートの記入)	
16:10 ミニレクチャー「教育方略」(30分)	12:00 アンケートと名札の回収	
	12:05 昼食(55分)	
	13:00 バス出発	
	14:30 JR札幌駅北口到着	



写真1 佐伯総長の挨拶

写真2 岡部教授のミニ講義

表2 各グループが作成したシラバスから ... 科目名と目標

<p><グループ A>一般教育演習 (学生数 20, 90 分授業を週 1 回で 15 週) 【科目名】 一般教育演習「原子力から考える」 【一般目標】 日本の原子力エネルギー政策をめぐる諸問題への理解を深めるために、文理両方のさまざまな角度から基本的な知識を会得し、教員及び学生相互のディスカッションを通じて様々な問題を検証・対処する能力を身につける。 【行動目標】 ① 原子力と新エネルギーについての基本的知識を習得し、説明できる ② マスメディアからの情報を的確に判断・検証できる。 ③ 科学技術者と一般の人々との適切な関わり方について自分の考えを表現できる。 ④ 様々な科学技術を一般の人々の生活への適用に際する問題点について、ディスカッションができる</p>	<p>① 札幌に居住している外国人データの収集・分析を通じて調査手法・調査項目を具体的に考えることができる。 ② 実際に調査に出かけ設定した対象者とコミュニケーションをとり適切なデータ収集ができる。 ③ 得られたデータを整理し問題を抽出することができる。 ④ よりよい多文化都市のあり方を議論することができる。</p>
<p><グループ B>一般教育演習 (学生数 20, 90 分授業を週 1 回で 15 週) 【科目名】 一般教育演習「科学のウソ?/ホント?」 【一般目標】 自分で調べ、考え、判断する力を身につけるために、疑似科学に関する具体的な事例を検討する。 【行動目標】 ① 科学的真偽が問題視された過去からの現在の著名な事例について調査することで、調べる力を身につける。 ② 調べた事例をもとに肯定派と否定派に分かれてディベートを行うことで、科学的思考法と判断力を身につける。 ③ 異なる立場の講演を聞き、科学的立場から争点を理解し、的確に判断する。</p>	<p><グループ D>総合科目 (大講堂, 90 分授業を週 1 回で 15 週, 総合入試入学者のための科目) 【科目名】 総合科目「科学・技術の発展がもたらしたもの」 【一般目標】 科学・技術とは何か、科学・技術の発展によって社会に何がもたらされるかを理解するために、多くの科学・技術に関する具体的な発見・転換の経緯を学ぶ。 【行動目標】 ① 科学・技術の発展にかんする具体的事例を挙げて、それが社会に与えた影響について説明できるようになる。 ② 科学的な思考を形成する主要素について説明できるようになる。 ③ さまざまな自然現象・技術事例に対し、論理的かつ建設的な批判が行えるようになる。</p>
<p><グループ C>フィールド型一般教育演習 (学生数 20, 集中授業 1 週間/月曜日に出発して金曜日に帰る) 【科目名】 一般教育演習 (フィールド型)「札幌における外国人の生活実態を調査せよ～フィールドワークの進め方を学ぼう～」 【一般目標】 多様な社会問題を理解し実践的に対応するためにフィールドワークの手法を身につける。その事例として外国人の生活実態に着目し多文化都市形成に向けた問題を見出す。 【行動目標】</p>	<p><グループ E>大学院共通科目 (90 分授業を週 1 回で 15 週, 6 名程度の講師が交代で行う) 【科目名】 総合科目「超高齢社会におけるセルフメディケーション学」 【一般目標】 超高齢社会において健康に生きるために、健康に関する知識を多角的に学び、それを社会に還元できる技能を身につける 【行動目標】 ① 老化・健康と栄養・運動・生活習慣・医療・薬学を系統立てて説明できる。 ② 健康維持・増進活動に関し習得した知識を纏め、社会へ還元するための方策を示す。 ③ 健康に関わる手だてを学び自身の健康管理を設計する。</p> <p>※【一般目標】は北大のシラバスでは「授業の目標」、【行動目標】は「到達目標」に当たります。 行動目標 (到達目標) は、学生がこの授業を通して身につけるべき能力を具体的に示し、成績評価の基準になります。</p>



写真3 「北大方式」グループ討論

写真4 修了証の授与式

高等教育フォーラム開催される

OIST の挑戦

11月21日に情報教育館4階において沖縄科学技術大学院大学(OIST)科学技術研究科長 Jeff Wickens 博士の講演「OISTの挑戦—真に国際的、学際的な大学院を目指して—」が行われました。

沖縄科学技術大学院大学は2012年9月の開学に向けて準備を進めています。学際的な5年一貫制の博士課程(科学技術研究科)、学生、教員の半数以上が外国人という真に国際的な環境の下、英語による教育研究など、これまでの日本の高等教育には例のない新しい試みを通じて、世界トップクラスの大学院大学を目指しています。

特筆すべきは、学際的な教育内容だけではなく、全科目を講義でなくチュートリアルで教えることです。チュートリアルではPBL(Problem Based Learning: 問題解決型授業)という、30年ほど前にカナダではじまった授業形態が使われます。最近、医学部を中心に欧米の大学で急速に普及しており、今後の日本の高等教育に与える影響が大きそうです。

研究大学における教育の質改善法～カリキュラム改革とFD～

11月30日に情報教育館3階中講堂で本機構特任准教授のHo Shi-Huei(何希慧)先生(台湾・東呉大学准教授)が、Part1「研究大学における教

育の質改善法～カリキュラム改革とFD～」, Part2「台湾の高等教育の現状と改善について」と題して講演されました。

Part1では研究大学における質保証のためのラーニングアウトカム目標の共通化、カリキュラム改革、FD、教育・学習評価、カリキュラムマップ、全学教育の改革、FDのための教員支援システムと政策について、Part2では台湾の高等教育の歴史、政策、教育統計、研究大学の改革などについて、台湾の風景・名所の紹介をまじえて解説されました。

台湾の大学進学率は韓国同様90%に達しようとしています。約160の大学があり、今後心配されるのは若年人口の減少に伴う入学者の減少です。

東呉大学では最新の教育制度を導入し、教育力の強化に努めています。教育目標を設定し教育評価と改善を行うPDCAサイクルが大学運営に組み込まれ、アウトカム評価がすでに採用されており、カリキュラムポリシーおよびディプロマポリシーに対応した能力取得の有無をチェックしています。学習指導の効率化を図るために学習ポートフォリオも導入されています。学習サポート制度、カリキュラムマップの作成など日本の大学が今後取り組もうとしている改革もすでに実施されています。

台湾の大学の制度改革の速さに驚いた講演でした。
(細川 敏幸)

写真1 Ho先生の講演



平成23年度北海道地区大学FD・SD推進協議会総会開催される

標記の会合が今年度はSDに重点をおいて10月19日(水)に学術交流会館で開催されました(表1)。

特別講演

まず愛媛大学の米澤先生がSPOD(四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)におけるSDの取組

について講演されました。

SPODは平成20年度文部科学省戦略的大学連携支援事業に採択され、愛媛大学が代表校です。そのねらいは、四国地区の33大学・短期大学・高等専門学校が連携して、域内のFD・SD事業を効率化、高度化、実質化することです。愛媛大学の6名を含

表1 平成23年度北海道地区大学FD・SD推進協議会総会プログラム(2011年10月19日)

第1部(10:00～12:00) 会場：学術交流会館小講堂

1. 開会挨拶(北海道地区FD・SD推進協議会代表幹事校)

北海道大学 高等教育推進機構 生涯学習計画研究部門長 木村 純

2. 特別講演「SPOD及び教職員能力開発拠点におけるSDの実践例」

愛媛大学 教育学生支援部 次長 米澤 慎二

3. 議事

第2部(13:00～15:00) 会場：学術交流会館第2・3・4会議室

テーマ別セッション

テーマ1：SDにどう取り組むか

テーマ2：学生による授業評価を授業改善にどう役立てるか

テーマ3：教員の教育評価について

む 15 名の各大学教職員で運用され、教職協働により SD 研修の企画、立案、事前準備、講師派遣・招聘を行っています。

職員の能力開発は自己開発 (Self Development)、職場内教育 (On the Job Training)、職場外教育 (Off the Job Training) から成り、これを組織的に運用する必要があります。

SPOD が提供する SD プログラムは、①大学人・社会人としての基礎力養成プログラム②講師養成研修③次世代リーダー養成プログラム④高等教育トップリーダーセミナーなどです。平成 21 年度からは教育関係共同利用拠点としても機能しています。

SPOD-SD は、地域の「知の拠点」である四国内の大学等の職員が組織的に共同開発した職員養成プログラムで、「大学、短期大学、高等専門学校のジェネラリストとしての広汎な素養に加え、スペシャリストとして特定の分野における能力開発を行うことにより、高等教育のプロフェッショナルを育成する」取組と定義されています。

SPOPD の SD プログラムは、教職協働により① SD プログラム構想②合宿セミナー実施③ SD プログラムチェック④ SD プログラム改善の手順で開発し、合宿形式のグループ学習によって理論と実践を融合させた効果的なプログラムを構築しました。研修後のアンケートでは、9 割超の参加者が満足し、研修内容は自分の業務に生かせると答えています。

さらに、スタッフ・ポートフォリオ (SP) の導

入を始めています。SP を使った自己省察によって、自らの成長を認識して業務改善に役立てるとともに、自己のビジョンやゴールを明確にすることで、キャリア形成を図ることができます。(細川 敏幸)

テーマ 1 : SD にどう取り組むか

参加者は 10 名、内訳は私立 5 大学 5 名、国立 4 大学 5 名、事務職員 6 名、教員 4 名でした。

自己紹介の後、北海道教育大学釧路校の杉山佳彦教授が釧路校のカリキュラムの現状と課題について報告されました。釧路校では教育現場での研究・実習と理論的な学習をつなぐ「媒介科目(教育実践論)」を通じて教職の力量形成をめざしています。職員の間にもこのカリキュラムの内容を熟知し教員と一体となって進めようとする気運が高まり、自主的な勉強会が始まっています。

討論では、職場において SD を継続するのに必要な条件に焦点を当てて意見交換と、各大学の現状報告が行われました。職場の現状と問題、大学の理念・目標についての共通理解が大切なことが確認されました。また、これまでの年功序列的な職員の処遇が SD をすすめる上で障害になっているのではないかと、活発で人脈豊富な者はよいが、職場全体の力を高めるにはそうでない者も引き上げていく必要があるという指摘がありました。研修成果の共有を図り、若手の出番を増やす取組を行っている事例や、教務系職員が新入生ガイダンスの改善に取り組み、学生に



写真 1 米澤慎二氏の特別講演



写真 2 テーマ別セッション 1

考えさせる企画を行った事例などが紹介されました。共通しているのは、意欲と自発性を生かし学習成果を共有できる職場づくりです。

これら道内の大学が個別、あるいは共同で行ってきた研修の成果について学び合う機会をつくっていくことが望まれます。課題として、SDと職員研修の関係について整理すべきことも指摘されました。(光本 滋)

テーマ2：学生による授業評価を授業改善にどう役立てるか

国立6大学、私立4大学、1高等専門学校の計11校から14名が参加しました。

授業評価アンケートは、現在ではほとんどの大学で実施されていますが、結果の利用法はさまざまです。点数化して優秀教員の表彰や研究費・ボーナスに反映する事例もあれば、下位の者に学長との面談を課す事例もあります。結果の公表についても、全学のすべての授業について結果を閲覧できる事例もあれば、授業担当教員と受講学生のみに制限され、学長すら見ることができない事例もあります。

アンケート様式にも興味深い変化が見られます。マークシート方式では、学生がよく縦一列に適切にチェックしてしまうため、選択式の質問項目を「この授業に満足ですか」の1つのみにした事例があります。ここまで簡略化しなくても、実際は満足度しか教員評価に使っていない事例もあるようです。

アンケート結果が授業改善に利用されているのか疑問視する声もあります。結果を見もしない教員がいるのも現実です。ある大学ではアンケート結果に対するコメントを教員に課しています。

アンケート結果が教員評価に使われ始めた一方で、「アンケート項目がプレゼン技術に片寄り過ぎではないか」「点数稼ぎのために授業内容レベルの下落を引き起こすのではないか」などの議論もありました。授業内容・構成に関する設問もバランスよく取り入れる必要があります。(山田 邦雅)

テーマ3：教員の教育評価について

国立2大学、私立1大学、2高等専門学校の計5校から5名が参加しました。

まず司会の北海道工業大学有澤準二教授が、いくつかの大学のホームページに掲載されている教員活動業績評価の事例を紹介し、つづいて各大学・高専の事例紹介を行いました。最初の大学では、教員の業績データは教員がホームページで「大学情報データベース」に直接入力し、業績の評価とその利用法は部局に任されています。別の大学では同様のデータベースに教員が入力するシステムで、研究費に反映される「研究に関する項目」の入力率は高いが、「教育に関する項目」は低いそうです。

次に高専の事例では、相互評価として教員が良くやっている教員3名を挙げ、学生も良くやっている教員の名を挙げるという方法で表彰に使われているが、教員が納得する明確なポリシーが必要という紹介がありました。別の高専では、5年間ほど自己評価をやり管理職がポイントをつけ研究費に反映させていたが、いまはJABEE、認証評価、外部評価を受けていること、授業アンケートはWeb入力の時間を設けて99%が入力しているが、その処理に時間がかかることなどが紹介されました。ある大学の授業評価では学生の入力率が、Webのときは60%、紙のときは80%だったそうです。

討論では、ある高専では新任の先生は科目に関係なくよい授業を見に行って参考にするのに対し、ある大学では附属学校に見に行くということでした。また、授業評価が高い先生の特徴として、2回目の授業から学生の名前が言えることや、メモの取りやすい授業をしているという指摘がありました。「小中高校では研究授業が盛んだが高専ではどうか」という質問に、教員相互の授業参観が行われているが、見る人が同じになりマンネリ化しているので見直しが必要という話が出ました。

全体に「教育評価の活用」に関する報告は少なく、テーマ2の「学生のアンケート」に関する話題もいくつか出ました。一つは、授業アンケートでは、学生は意見の言いっぱなしではまずいので、なるべく間をあけないでリアクションが必要なこと、卒業式直後にアンケートをやっているが、かなり信頼度が高いこと、高専のOBアンケートでは語学の評価が低いことなどが話されました。(西森 敏之)

生涯学習 LIFELONG LEARNING

北海道地区大学 SD 研修「大学職員セミナー」

2011年度の北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」は、高等教育推進機構、教育学研究院、総務企画部人事課、学務部教務課の主催で、11月9日、10日に遠友学舎で開催されました。このセミナーは、2006年度に本学の公開講座として始まり、2009年度からは北海道地区大学SD研修として、道内の高等教育機関、私立大学協会の協力も得て実施しており、今年度で6回目となります。

昨年度に引き続き今年も「大学職員の意識改革とキャリア形成」をテーマとして講演・報告およびワークショップを行いました。本学職員16名を含めて道内国公私立大学、短期大学、高等専門学校から48名（男性33名、女性15名）の職員が受講者として参加しました。今年度の受講者は大学職員としての経験年数5年未満が20名、5年以上10年未満が17名で、若手中心の研修となりました。

1日目は中央大学横濱山手経営再生室担当部長、大学行政管理学会元会長の横田利久氏に「大学の職員力」をテーマにご講演いただきました。長年の大学職員としての経験をもとに、これからの大学職員に求められる役割についてお話しいただきました。

また、愛媛大学教育学生支援部次長の米澤慎二氏には「大学における人材育成ビジョン」と題して講演をいただき、愛媛大学における組織的な能力開発体系づくりや職場における能力開発に関する評価

の取り組み事例についてご紹介いただきました。

その後、8グループに分かれてワークショップを行いました。受講者を対象とした事前アンケートに基づき、(1)自分自身の研修の体験も踏まえて、大学職員の研修において何を学ぶことが必要だと考えるか、(2)研修で学んだことを活かすには職場・大学にどのような条件が必要か——の二つのテーマを事前に設けて討論しました。2日目の昼まで合計約4時間かけて各グループで議論を深めました。

ワークショップの途中、2日目の午前中には、教育学研究院の光本滋助教が「大学におけるSD研修の現状」と題して、道内の高等教育機関を対象に実施した各機関での職員の研修機会に関するアンケート調査の結果を報告しました。

最後に2日目の午後に、各グループからワークショップの討論結果の発表を行いました。研修に関する問題点として、「日々の業務に追われることで研修参加のモチベーションをもちにくい」「人事異動で成果を生かすにくい」「目的意識なく何となく参加してしまうことがある」などが挙げられました。研修を活かすためには「大学の中で研修成果を共有する機会を積極的に設けることが有効。発表を念頭に置くと研修も前向きな姿勢で受講できる」「人材育成が計画化されていることが大事」などの意見が出されていました。(三上直之)



写真1 講師の講演を聞く受講者



写真2 ワークショップの成果発表

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

高校生 31 名が全学教育科目を受講

～高大連携授業聴講型公開講座～

第2学期に恒例の北海道大学高大連携授業聴講型公開講座による高校生の全学教育科目受講が実施されています。今年度は札幌市内の5つの高等学校(札幌旭丘, 札幌北, 藤女子, 札幌南, 札幌開成)から計31名(2年生16名, 1年生15名)の生徒が総合科目10科目と主題別科目7科目を受講しています(表1)。

高校生が北大生と共に授業を受けるこの制度は、5回の試行を経て平成21年度から本格実施され、高校生は本学の授業の実際や学問のおもしろさを発見しようと意欲的に受講しています。

授業開始に先立ち、9月20～28日にオリエンテーションを学校別に実施しました。高校生は情報教育館4階多目的共用教室(1)で全学教育科目の概要と受講の留意点などの説明を受けたあと、本機構および周辺施設で授業の行われる教室を確認し、北図書館でガイダンスを受けました。

高校生の聴講をお認めくださった先生方の多大なご配慮とご協力に感謝申し上げます、この事業の充実発展にご支援とご助言をお願いいたします。

(山岸 みどり)

表1 平成23年度 高大連携授業, 受講科目名, 担当教員, 受講者数

科目名	講義題目	担当教員	所属	受講者数
環境と人間	2030年エレクトロニクスの旅	小野里雅彦	情報科学研究科	1
同上	地球未来学:2070年の人類生存環境	船水 尚行	工学研究院	3
同上	くらしと動物	安居院高志	獣医学研究科	1
同上	海と生命	都木 靖彰	水産科学研究院	1
同上	生体機能高分子が拓く先端生命科学II	出村 誠	先端生命科学研究院	3
同上	脊椎動物の生態と進化	坪田 敏男	獣医学研究科	2
同上	北大総合博物館で学ぼう:「ヒグマ学入門」	天野 哲也	総合博物館	1
健康と社会	ようこそ身体運動の世界へ	浅賀 忠義	保健科学研究院	2
同上	なぜ病気になるのか?—治療医学から予防医学へ—	武藏 学	医学研究科	2
人間と文化	誰でもプログラミング	岡部 成玄	情報基盤センター	2
科学・技術の世界	地球惑星科学のフロンティア	池田 隆司	理学研究院	1
同上	自己と認知の発達	榎 洋一	非常勤講師	2
同上	ゼロから始める「科学力」養成講座2(自然科学2)	鈴木 久男	理学研究院	5
社会の認識	現代社会における法と正義	郭 舜	法学研究科	2
同上	農業・農村の地域調査	仁平 尊明	文学研究科	1
芸術と文学	怪物論	武田 雅哉	文学研究科	1
同上	西洋文学王道ツアー	高橋 吉文	メディア・コミュニケーション研究院	1
計	17科目	17名		31名

(科目区分) 総合科目: 環境と人間, 健康と社会, 人間と文化
 主題別科目: 科学・技術の世界, 社会の認識, 芸術と文学

科学技術コミュニケーション CoSTEP

CoSTEP とその受講生 研究者の「国民との科学・技術対話」をサポート

研究成果の積極的な公表・普及

研究者自らが研究の成果や意義をもっと社会や国民に伝えるようにとの趣旨から、1年半ほど前、ある施策が講じられました。1件当たり年間3千万円以上の公的研究費の配分を受けた研究者は「国民との科学・技術対話」に積極的に取り組むべきである、そして研究内容や研究成果の積極的な公表・普及に努めているかどうかを中間評価の評価項目の一つにするという方針を、科学技術政策担当大臣と総合科学技術会議の有識者議員たちが決めたのです。

この施策に該当する研究者は北海道大学にも少なくありません。そこで、CoSTEPでは2011年4月から、研究者による「国民との科学・技術対話」をサポートする体制をとりました。対話のための「場と手法」の提供を、まず「最先端・次世代研究開発支援プログラム」に採択された7人の方を対象に開始したのです。

サイエンスカフェ

年6回開催するサイエンスカフェ札幌のゲストに4人の方をゲストに迎えました。①光触媒をテーマにした「ただの水からエネルギー?」、②ある種の分子の発光性メカノクロミズムという特性を紹介する「キセキが光る～光る分子のミラクルパズル」、③新しい視点からのがん研究をテーマにした「おしくらさいぼう、押されてなくなれ! ～がん細胞と正常細胞の攻防～」(写真1)、そして④ドラッグ・デリバリー・システムについての最先端研究を紹介する「『くすり』よ届け～ナノサイズ船 細胞の宇宙を行く～」です。

インターネット・ラジオ番組

CoSTEPでは30分ほどのインターネット・ラジオ番組(Podcast)を月に1本のペースで制作し、

北海道大学で行われている研究や研究者の人柄などを紹介しています。そのゲストにお二人の方を迎えました。また映像作品でもお一人を取り上げ、YouTubeで公開しました。

電子書籍と小中学生向けイベント

さらに研究内容やラボの様子を動画も含めて紹介する電子書籍を2冊制作し、近くインターネットで無料公開します。

CoSTEPは昨夏、北海道新聞社主催の小中学生向け「進学フェア」に協力して、小中学生および保護者を対象に、最新の科学研究の一端を紹介する場を設けました。そこにもお二人の研究者に出演していただきました。

これらサイエンスカフェ以外の「場と手法」は、北海道大学CoSTEPならではのものです。研究者の方々が「研究内容や研究成果の積極的な公表・普及に努めている」ことをアピールするための、強力な裏づけになるものと確信しています。

(杉山 滋郎)



写真1 第60回 サイエンス・カフェ札幌「おしくらさいぼう、押されてなくなれ! ～がん細胞と正常細胞の攻防～」

日誌 EVENTS, *October-November*

10月

- 4日(会議) 平成23年度第2回IRシステムコンソーシアム設置準備委員会
- 8日(行事) 留学生対象キャンパスツアー
- 8日(行事) 北大セミナー in 北見
- 11日(行事) 留学生対象キャンパスツアー
- 11～18日
(行事) AO入試・帰国子女入試願書受付
- 12日(会議) 平成23年度第3回IRシステムコンソーシアム設置準備委員会
- 15～16日
(行事) 北海道高校文化連盟理科研究審査委員の派遣
- 19日(会議) 北海道地区FD・SD推進協議会総会
- 25日(会議) 第4回総合教育移行専門委員会
- 27日(会議) 第5回教育改革室会議
- 29～30日
(行事) 秋のキャンパスツアー
- 31日(会議) 第7回総合教育教務専門委員会(持ち回り)

- 8日(行事) 札幌旭丘高校学問研究会
- 9～10日
(研修会) 北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」
- 11～12日
(研修会) 第19回北海道大学教育ワークショップ(奈井江町)
- 12日(行事) 北大進学相談会(名古屋会場)
- 13日(行事) 北大進学相談会(大阪会場)
- 15日(行事) 冬山登山講習会
- 17日(行事) ボランティア養成講座
- 17日(説明会) 札幌南高校での北大説明会
- 17～18日
(シンポジウム) 第14回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウム(ソウル大学)
- 19日(説明会) 駿台予備校主催進学相談会(札幌)
- 20日(行事) AO入試・帰国子女入試第2次選考日
- 21日(研修会) 学生相談室ワークショップ
- 21日(研究会) 高等教育フォーラム「OISTの挑戦—真に国際的、学際的な大学院を目指して—」ジェフ・ウィッケンス博士(沖縄科学技術大学院大学)
- 24日(会議) 第6回教育改革室会議
- 25日(会議) 第4回全学教育専門委員会
- 29日(会議) 第8回総合教育教務専門委員会
- 30日(研究会) 高等教育フォーラム「研究大学における教育の質改善法～カリキュラム改革とFD～・台湾の高等教育の現状と改善について」Ho Shi-Huei 何希慧(台湾・東呉大学准教授)

11月

- 1日(説明会) 代々木ゼミナール札幌校での北大説明会
- 2日(会議) 入学者選抜委員会
- 2日(会議) 平成23年度第4回IRシステムコンソーシアム設置準備委員会
- 5日(行事) 北大進学相談会(東京会場)
- 8日(行事) AO入試・帰国子女入試第1次選考結果発表

行事予定 SCHEDULE, *January-March*

	【日(曜日)】	【行事】
1月	5(木)	授業再開
	13(金)	センター試験準備(休講)
	14(土)～15(日)	大学入試センター試験
	26(木)	木曜日の授業終了日
	31(火)	火曜日の授業終了日
2月	1(水)	水曜日の授業終了日
	2(木)	初習外国語統一試験日(通常授業は休講)
	3(金)	金曜日の授業終了日
	6(月)	月曜日の授業終了日(第2学期授業終了日)
	7(火)・8(水)	学部移行ガイダンス
	9(木)	成績報告締切(常勤[Web入力],非常勤[帳票])
	16(木)	平成18～23年度入学の全学教育科目学修簿Web上公開
	16(木)～20(月)	成績評価に関する申立て期間
	16(木)～22(水)	全学教育科目成績確認,自由設計科目登録変更期間
	25(土)～26(日)	北海道大学第2次入学試験(前期日程)
	28(火)	成績確定
	29(水)午前	進級判定/進級要件単位充足判定
3月	12(月)	北海道大学第2次入学試験(後期日程)

ニュースレター 2012, No.89 目次

巻頭言 北図書館の現状と全学教育 望月 恒子..... 1	第 14 回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウム 分科会「高等教育におけるティーチング・エクセレンスの方針と戦略—過去, 現在, 未来」..... 13
成功するキャリア教育をめざして ～ 2011 年度 IDE 大学セミナー開催される～ 4	総合教育の充実を目指して ～第 19 回北大教育ワークショップ～ 14
第 3 回「シラバスコンクール」推薦科目を公表 6	高等教育フォーラム開催される 16
科目責任者・クラス担任からひとこと 河合 靖..... 7 野寄 龍介..... 8 橋本 誠..... 8	平成 23 年度北海道地区大学 FD・SD 推進協議会総会開催される 17 北海道地区大学 SD 研修「大学職員セミナー」..... 20
第 2 回クラス担任連絡会を開催..... 9	高校生 31 名が全学教育科目を受講 ～高大連携授業聴講型公開講座～ 21
学部・学科等移行ガイダンス 学部・学科等紹介.... 9	CoSTEP とその受講生 研究者の「国民との科学・技術対話」をサポート 22
人をつなぎ、学生生活の可能性と多様性を提示するピア・サポート活動 平 侑子..... 11	日誌・行事予定 23
第 61 回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会に参加して..... 12	目次・編集後記 24

編集後記

ミュージアムなどの片隅にある図書コーナーで、手に取った本に引き込まれ、読みふけってしまうことがあります。先日、ある国立公園のビジターセンターを訪れた時もそうでした。「本など家に帰ってからでも読めるのだから、書を捨てて大自然を味わわねば」と頭では考えるのですが、なぜだか読むのを止められません。今ここでなくても手に入るはずの本に惹かれる不思議。

それで思い至ったのは本棚の力です。ここで本棚というのは、図書を収める物理的な入れ物ではなく、限られた空間に一定の意図をもって集められた一群の書物と、それらが存在する場のこと。つまり、私をしてその本を手にとらせたところのものです。インターネットであらゆる情報にアクセスできる今日でも、なにかを知ろうとする意欲や動機は検索では手に入りません。知る意欲や動機を与えてくれる「本棚」は図書室だけでなく至る所にあるはず。それらを大事に育み、生かしたいものです。(猶)

ニュースレター (旧「センターニュース」)
(北海道大学高等教育推進機構広報誌)
通算 **第 89 号**

発行日： 2012 年 1 月 25 日
発行元： 北海道大学高等教育推進機構
(旧高等教育機能開発総合センター)
〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
電話 (011) 706-7520・FAX (011) 706-7854
編集委員： 西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅
木村純・亀野淳・三上直之・瀧澤一騎
山岸みどり・鈴木誠・池田文人
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話：(011) 706-7514;FAX (011) 706-7521
インターネットホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>